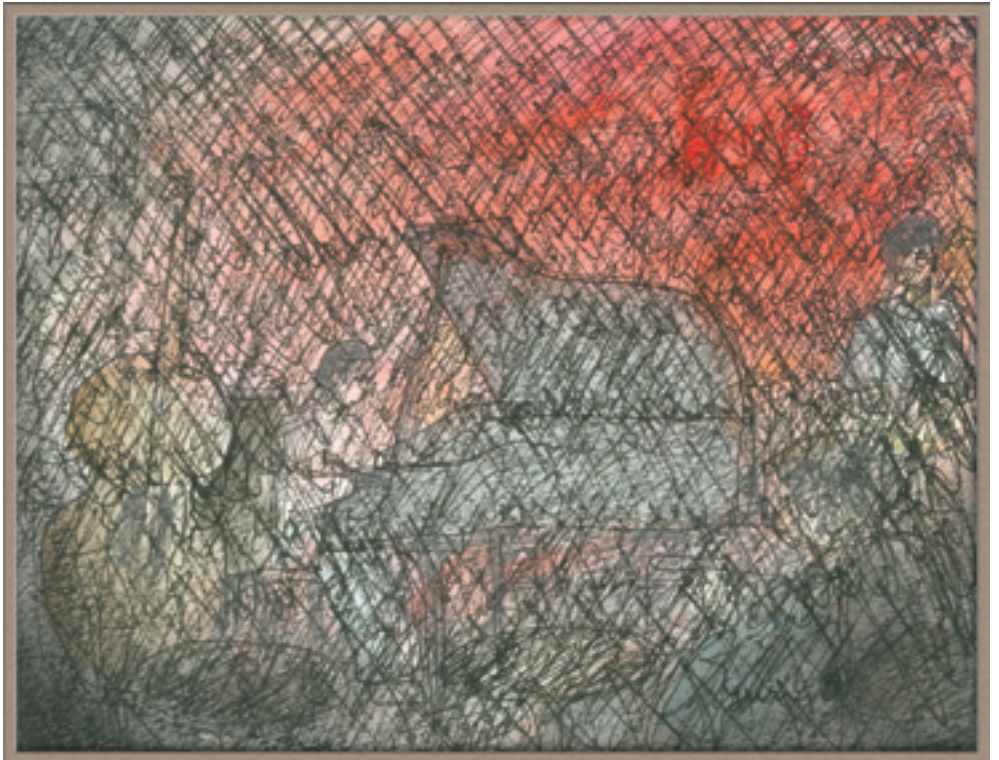


三河 アララギ

平成二十五年

四月号

第六十卷 第四号



ニューヨーク日記(78) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

September 16, 2012 : Maison Kaiser

Blue Shoe Diaries



パリの人気パン屋さん、メゾンカイザー、がNYにお店開きました!(日本にはもう有るらしい) 彼のバゲットはパリでもトップクラス、NY で色々なバゲット試してみたけど意外と「これ!」って言う程のバゲットは見つけるの難しいのよね。だから興味津々でお店まで行ってきました!カフェも有って超混んでいたけど念願のバゲット買えました!それで嬉しいことに美味しかった!帰って来るまでに半分ぐらい食べちゃってました~!このお店があと2店(家からもっと便利なエリアに)開くそうだから楽しみ!

At last! Maison Kaiser opens a store in NY. He's well known in Paris for his baguette. Surprisingly with all the gourmet bakery/pastry shops in NY, it's still hard to find a true baguette. So, I've been excited about this store opening for a while. Happily, on my day off, took myself over to the upper east side to go get said baguette. The cafe attached to the shop was packed and a bit crazy but I managed to get one. And it did not disappoint! Half of it was gone by the time I reached home. He plans to open 2 more stores in the coming year and closer to my neighborhood!

目次

第六十卷第四号(通卷七一二号)

表紙 音楽	今泉 由利 (1)	シラス穫り	白井 信昭 (27)
ニューヨーク日記(78)	Blue Shoe (2)	ことよせ	いーはとぶ (28)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	大須賀寿恵 (4)	雪起こしの花	堀川 勝子 (29)
歌集「スモン」	岡本八千代 (5)	私の一首	内藤 志げ (29)
春の水	今泉 由利 (6)		青木 玉枝 (30)
福寿草	弓谷 久子 (7)		伊与田広子 (30)
節分	内藤 志げ (8)		小野可南子 (31)
露の臺	林 伊佐子 (9)		清澤 範子 (31)
淡雪	安藤 和代 (10)		近藤 映子 (32)
鴨	伊藤 忠男 (11)	贈呈誌	杉浦恵美子 (32)
病室	清澤 範子 (12)	俳句	植村 公女 (33)
掃き目	鈴木 孝雄 (13)		一石 (34)
オリオン座	胃甲 節子 (14)		喜仙 (35)
節分草	佐藤 喜仙 (15)		皓一 (35)
上野の杜	伊与田広子 (16)	子規の短歌革新とアララギの歌人(9)	佐藤 喜仙 (36)
ネーブル	半田うめ子 (17)	『歴代天皇御製歌』(十)	貫名海屋資料館 (37)
助け舟	近藤 映子 (18)	ある自然科学者の手記(11)	大橋 望彦 (38)
如月の初雪	足立 晴代 (19)	絹の話(29)	今泉 雅勝 (40)
粉雪	杉浦恵美子 (20)	物理学者と詩歌の世界(39)	鮫島 満 (42)
拡大鏡	平松 裕子 (21)	短歌に詠まれた茂吉	山本紀久雄 (44)
御津川	小野可南子 (22)	楽しい時間(5)	夏目 勝弘 (46)
紋付き鳥よ	山口千恵子 (23)	長塚節の病と恋と旅(2)	岡本八千代 (48)
雪洞	夏目 勝弘 (24)	『水魚』のことから(147)	今泉 由利 (49)
無住の寺	阿部 淑子 (25)	ことのはスケッチ(412)	平松 温子 (51)
海底	富岡 和子 (26)	和菓子街道(78)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定
紫雲英	秋山 逸穂 (27)		
北風			

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

沙羅の木の細き鋭き銀の芽の光り冴えかへる日となりてをり

P
23

竹の葉の万の葉億の葉一葉さへ春来る雨にぬれてそよがず

P
28

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

御用納めの式が終れば未施行の書類もロッカーに積みて鍵する

四月には何処の学校に居るらむか転出希望の欄書きながら

退職勧告受くる人びと入り来たり関りなき吾にも頭をさげる

春の水

蒲郡 岡本八千代

ほとばしる春の水受け葱洗ふ葱の白根のこの白光り

冴えかへる冷たき水の春の水外の井戸水水色淡し

春の水水色淡く光りつつわれの両手もろに注そそぎくるかな

大根を洗へばやはり大根も白光りしつつ水流れゆく

なんとなく葱きざむ音の寂しかり夕べの色の暗くなりつつ

朧月中天より届くほの明かりその下径を塵捨てにゆく

呼びとめて手にくださるるものは何うす黄色二つアヒルの卵

わが書屋の方丈の間にさしてくる新しきけふの春の日の光

はやばやと方丈ひとの一間に独りゐる何にも思はでたゞわれがゐる

時々雪の舞ひくる春のけふ夫の絵の会の「五人展」はじまる

福寿草

東京 今泉由利

鉢ほどの土を所有す真中には光集むる福寿草咲く

太陽の温もり花卉に集めゐる福寿草と日向ぼっこ

日溜まりの満開の花夕刻の花閉ず姿福寿草描く

自を守る反応機敏にて福寿草の根っこ逞し

透き徹る朝の光りにチュンチュンと私も和して雀とをりぬ

南のしし座みんなの胸のレグルスのやさしく光る春は来にけり

太陽の倍ほど巨き星といふシリウス白し明るく巨き

八時間未来へタイムスリップし真昼間にして今夜の星を

8・6光年前の光りは今とどくシリウスとして私の窓に

鷹峯の葱を焼きをりほっほっと五十年來の友を亡くする

節分

豊川 弓 谷 久 子

故郷の仄暗き部屋に丹念に豆まきし父よ今宵節分

国府の市の思ひ出話盛り上がる久びさ見たり姉の笑顔を

十銭玉にぎりて駄けをり一里の道を国府の市へと十歳の我

言ふまじき言葉飲み込み障り無き事のみ語りて友と別るる

前世も来世もあると説かれをり静誠様は仏の道を

輪廻転生と本に読みつつ来世を疑はざりし君を思ひぬ

為す事のある楽しさよ花柄の友禅の古着今日は解きをり

誰が人の羽織しものか男物の大島を解く糸きしませて

遮光にと始めて掛けしサングラス少し変りぬ我の世界が

めでたしと声かけやらむ還暦を一つ越えたる子の誕生日

露の臺

豊川 内藤 志げ

面影に繋がるもの一つだに父はわが血の中に生きゐる

わが夕餉食卓に並ぶ皿多し六十年前の母をし想うむとせ

日々に食む御菜の味を母上に一匙なりとも食べさせやりたし

配給の米を蓄へ蓄へし兄の出征の祝の膳にと

結核に逝きにし父の布団まで燃やしてわれら守りし母は

畑隅の細きポールにジヨウビタキ風に向ひてゆうらゆうら

作業場の窓より眺む紋付烏細きポールを撓めて止る

紫にまるまる丸く露の臺今日は採らずに眺めて帰る

臺に添う葉の愛らしく土深く鎌を刺し込み共に採りたり

蕾より小さくち小さきちい露の葉を白きお皿に活しておかむ

淡雪

岡崎 林伊佐子

淡雪が風に卷かれて杉森に積ることなく降りては消ゆる

足裏に碎け崩るる霜柱木漏れ日あびて白く光れり

杉森の有刺鉄線張る側に紫紺に輝く竜のひげの実

としどしの獣の被害に村人も椎茸栽培やめてしまひぬ

わが家のみ自給自足の椎茸の栽培してをり老いたる今も

日の差さぬ椎茸小屋にたれてゐる長き氷柱は凶器にも似る

車窓より仰ぎし滝の凍りゐて白昼なれど光りて寒き

ボタン押すくらしに慣れてふる里は調理に手間取る昔の厨房

亡き母の知らざる齢を重ねきて遺稿に学び作歌にいそしむ

夫のまく餌を待ちゐる寒雀樋に並びて居間を覗きぬ

鶉

豊川 安藤 和代

軽トラックに大根白菜積み込んで友持ちくれし冬日穏やか

わづか五本のブロッコリーを鶉は柔らかかき芽のみ荒してゆけり

悪戯も鳴き声も荒き鶉の憎めず歌に詠みて何首ぞ

漢字パズル解けず頭を抱えれば夕餉の支度の時間も迫る

交差点スクランブルを渡る時大都会のよう足早となる

誘われて友とドライブ浜名湖はうらかにして舟ひとつ浮く

山に沿ひ曲り曲りて鳳来寺門前茶店に甘酒すする

冷えし身に甘酒熱く通りゆく主人媼の笑顔も温かい

髪を切り耳にやさしく風の過ぐもうすぐ春とささやくように

咲く梅に目白遊べる朝の庭好きです好きです柔らかに春

病室

大阪 伊藤忠男

病室の窓は斑な雪景色春よ早くと祈る夜明けに

さわやかな東の空に手を合わす明日の日の出は病室の窓

寝付かれぬことに驚き気弱さを初めて知るや前日の夜

病室は夜の帳に包まれる窓に映るはビル常夜灯

手術前乱れし心微笑みの看護師ありて落ち着き戻る

手術室開きて逃げたきこの気持ち払うは医師の強気言葉で

閃光に包まれ意識遠くなる黄泉への道もかくの如しか

名前呼ぶ微かな声にトンネルを抜けて目にするこの世の灯り

薬剤を載せた台車の通る音微かに聞こえる眠りの中で

お腹開け内臓切除その痛みまだまだ続く5日目の朝

掃き目

春日井 清澤 範子

増築の出窓より庭を眺め見る朝よりの雨なり椿の葉にも

喘息にて伏しゐる吾に夫の焼く卵やきかな涙出で来ぬ

朝目覚め小鳥の声をききながら床の中にてしばし憩ひぬ

ゆとりーとバスに乗り継ぎ病院へ来ぬ薬の調剤屯服一錠増す

喘息の吾が咳の多ければ夫と娘が買ひ物に出る

八王子神社に門松飾りあり賽銭箱の前砂に掃き目

外に出れば風まだ強く肌を刺すマスク掛けして神社参拝

新春の雨は降るなり軒先をコトコト打つリズムありけり

五時すぎて吾雨戸を締るとき東の空に月はまんまる

冷蔵庫の横にはり置くメモ多し目薬一滴落して見むよ

オリオン座

沼津 鈴木孝雄

このところ顔見ないねと尋ねたら春まで持つかと奥さんポツリ

久しぶり物干し台にジャンパーが外出許可をもらえたのかな

葱水菜ほうれん草に小松菜よ冬の寒さをよく耐え抜きぬ

退職後十年経って古稀迎えエンディングノート書き始めるか

臘梅の黄色い花と空の青春を見上げてしばし楽しむ

オリオン座他を制して天上に五十年前も見た同じ星

東富士演習場の砲音が尖閣を機に大きくなりぬ

港湾に響く子供の笑い声冬の日本に春の気配が

鷗一羽群れを離れて堤防にどこの世界もいじめがあるのか

海鷗さん長い首を後ろに回し背中に乗っけて眠られますか

節分草

豊橋 胃 甲 節 子

せめてもの心は強く持たねばと白梅の香りの庭に誓ひぬ

節分草の一輪の写真新聞より切り抜き大切に引出しの中へ

窓越しの視線気にする事もなくみかんつひばむ目白愛らし

珍らしく今朝は大きなぼたん雪雨に混じりて舞ひ落ちてをり

ほらほらと夫に指差すぼたん雪淡く夢みし今朝のひとつき

少しばかり心弾むは庭に挿すみかんつひばむ目白見る時

白梅は次々咲きて孤独なる胸に沁み入る清しき匂ひ

思ひ切り水仙切りて下されば溢るる匂ひに頬を埋めて

クリスマスローズを初めて見たる日よ赤塚山ギョギョランドの玄関に

大鉢に成長の良きホワイトとローズのクリスマスローズ病みつきになる

上野の杜

東京 佐藤喜仙

二ヶ月の平日の公園口ラッシュ時のごと人をはき出す

春や昔子規がまり投げせし野原今や子規記念球場なる

寛永寺の牡丹の園はうららかや冬の牡丹はほうけてをりぬ

春の日にかたまり咲ける福寿草シャッター切る音次々と聞こゆ

三桮の枝々の先三叉にそれぞれ花つけ風に揺れをり

蕾もつ馬酔木を覆ふ梅の木の垂るる枝の先まで真白

金縷梅の盛りを少し過ぎし花牡丹の苑の一隅を灯す

緋に萌ゆる芽をかかげるる牡丹の木薫風うけて咲き満つらむ

牡丹園いたるところに俳句詠みの銘句駄句問はず立札のある

上野の杜古格ゆゆしき五重塔其に見送られ牡丹園出づ

ネーブル

豊橋 伊与田広子

夕方は早く戸締り家の中籠りて外には出ずときむる

独り居は恐ろしくなり夜は出ず日の落ちたれば雨戸締めたり

ネーブルの熟るる^{あたり}辺にひよの来て楽しそうなさえずり聞こゆる

ネーブルを取り終え後はひよの声一声も聞えずなりたり

柿の実は夏の日照にて落果せし気づきて水まき蜜柑は遁る

今朝寒き足に堪ふる外出を止めて家に閉じ籠りをり

今日は良き足も運びて買物に極寒に供へ用意の品

供養終え竹島見ゆるホテルにて御馳走頂きくつろぎみたり

長沢と蒲郡を結ぶトンネルはわれ知らぬ間に出来てをりたり

わが近く流るる新川天上川満水ならば逆流溢るる

助け舟

新城 半田うめ子

空腹くわくに居りてさびしく孫の来て助け舟となりて有がたく思ふ

憎まれていじめられてやさしくてもう会へぬなりひふみ様よ

西川の流れにしたがひ散歩する小さき小鳥の数羽舞ひをり

西川の川辺に咲く小さき花名を知らぬなり美しき花

大切に思ひしをうしなひ胸痛く民生委員の来てあらし言葉よ

亡き父の植えし柿の木数本の柿は毎年盗り行く人あり

若者は村の人なりし昔々力を合はせ米を作りき

雪煙上るが如く本宮の上しばらく眺むる裏の窓より

如月の初雪

名古屋 近藤映子

睦月末大寒の夕べ正に冷え如月一日八階の雪

我耳に何も聞えぬ降る雪は八階ベランダに白く白く

見降しの川向う長久手市の瓦家屋の残雪の白残りをり

如月の朝の冷気の身に沁みぬ洗濯物干す手先かじかむ

霜降りて堅くなりたる歩道沿い水仙間ばらに咲き香る

日曜日娘と共に夫見舞う手足擦りつつテレビを共に身る

我息子アメリカ出張二週間と夫の耳元にそつと伝えぬ

寒き朝ゆつくり起き上るよう我主治医私に話される事

我居間の真赤に真赤に咲き続くシクラメンの鉢に水そそぐ

近頃は気温の低き朝の外出は控える様にと医師の指示有り

粉雪

東京 足立晴代

粉雪舞う真白き道に輪だちありあす朝迄に積る深さよ

若人わこうどに話すすべなく過ぎし日の想い出話聞く人ありて

大正も昭和も遠くなりけり我が身の歳を如何に数えむ

紅梅の一輪咲きて吾が庭も日ごと日ごとに春めきてあり

冬枯れて庭のつくばい青ごけも茶ごけとなりて春を待つなり

寒月を仰ぎ見ながら暗き道えりもと衿元寒く風の過ぎゆく

歳わす忘れ幼児のごとく声をはりうたう童謡大合唱

出ぬ声も皆につられて高らかに思いもかけず張上げる声

不自由な体もシャキシャキ動こうと気力のいづる素晴らしきとき

片足立ち仲々出来ぬなさけなさ今更かかるがうらやましかり

拡大鏡

蒲郡 杉浦恵美子

有り難く父が遺せし拡大鏡使っております字引見るため
手相見が使ひさうなる特大の拡大鏡を字引にかざす

我が父が拡大鏡を覗いては字を引く不自由漸く分かる

「無事でした」その時共に歓びて居しこと哀し今となりては

裏藪の竹の枝々音立てて撓んで揺れてこの春一番

冬なれば我が心身も縮こまる夫を想へばいよいよ硬く

この冬もやはり寂しき儘なれどここにも春は来たるものらし

美味しいと感じてちくり胸痛む食わずに逝きし夫を思ふと

西陽とは西方浄土の方向か不意にまた夫思ひ出でたり

蘭亭序臨書せし頃我が描く未来像とは斯うでありしか

御津川

豊川 平松 裕子

高速道の風にはためくのぼり旗父母のすでにまさぬ思ふ

何を告ぐのぼり旗ならむただ一本真冬の風に強くはためく

花みずきのとがり芽のかたき一枝と紅の椿とが今日の掛け花

チキチキとおきくる炭の脇に置きし香はたちまち部屋に薫れり

両サイドのバックミラーは闇を写す月は明るく我につきくる

枯れ果ててなほなほ立てり道の辺の何草なるか風になびける

午前零時厨の換気扇を止むるときポツポツ雨の降る音聞こゆ

朝より工事音の鳴り響く末だ終らぬ護岸工事は

果てもなく変はり続ける御津川か我が幼き日の川にはあらず

十二時間厨に立ちてやうやくに座るときは運転のとき

紋付き鳥よ

豊川 小野可南子

梅の木の黒き細枝移りつつ小さき二羽の睦まじくあり

待合室に所在もあらず窓に寄る動けるもの何も無き空

齒の治療にいたく疲れて帰りきぬ狭庭に遊ぶ紋付き鳥よ

囲ひゐる我が広縁の鉢々に染み入る染み込むこの寒の水

ややにややに固きつぼみもひとつふたつほぐれてきたよ今朝の発見

昨日より今日の緑は確かなり角ぐむ水仙列なし並ぶ

石臼の水に氷は厚く張る水底の目高いかにやいかに

ふかぶかと大きい息して歩み出す光りの春と独りごちつつ

畔の草枯れが見ゆるその下に緑たくまし萌えいだすもの

ひと咫あたに足らざる鉢の沈丁花我が朝戸出に香り聞かしむ

雪洞

豊川 山口千恵子

青あをと繁れる椋の木の下陰に山羊など飼ひて住みてゐたりき

春近き気配の風吹く空見上ぐ椋の大樹の秀枝細々

枯れ草の間より青く丸まろし露の臺出づ幾つもいくつも

摘み取りし淡々青き露の臺ほのぼの香る露味噌となる

椎の木の繁る木陰に静まりて山の麓の小さき社

神前に巫女舞を舞ふ少女らは髪に飾りぬ水仙の花

たちまちに宅地となりし広き土地角地より建ちゆく新しき家

如月の風にあてむよ雛飾り言葉少なく夫と出しゐる

かにかくに今年も飾りしお雛様夫の点せしか雪洞の明り

ほのぼのと夕べの部屋に点りゐる雛の飾りの雪洞の灯

無住の寺

豊川 夏目勝弘

老僧の逝きて荒れにし寺の庭いざ何処より手を入れゆかむ

紅梅にそして白梅桜に椿せめぎ絡まる枝枝みつむ

あと十日すれば紅梅白梅の花咲く枝もかまはず落す

紅梅の纏れる太枝挽きてゆく血潮の色の大鋸屑かかる

枝枝にゆとりの出来し寺の庭低き枝をジョウビタキ移る

メジロの群れ追ひ払ひしヒヨドリは一声たかく鳴きて飛び去る

黒ぐろと出でし庭土すがしけり枝よりモズが下を見てゐる

石仏の落ちゐし頭部を接着し千両の朱実の一枝ささぐ

庭土に冬日あまねしそこに繁れる千両も衰へゆかむ

無住寺となりしここに御霊らのたまには帰りきたりて遊べ

海底

横浜 阿部 淑子

アルジェリア救出作戦期待すも犠牲者多く心沈みぬ
海外に文化を求めいさみ出で不慮の災難聞こゆる多し
国富まば核生産に力入るる何故に出来ぬかやさしさ生産
海底の五千メートル深くありレアアースの活用の日を
枝枝は葉っぱ一枚とどめざり春待つ姿の美しくして

紫雲英

東京 富岡 和子

古稀ほどに住みこし東京新しいとりまくビルをただただ見上ぐ
雨水あとアミガサユリの初なのり球根増ゆる褐色の莖
香りゐる二月の午後のキッチンに蜂蜜足して金柑煮てる
去年蒔きし紫雲英待ちをり待ちどうしビニールカバーを今日の真冬日
雪柳に積もる白雪五度目なり小さき芽たしかにたしかに育ち

北風

「招待」 秋山逸穂

ビルディングのあい間吹き抜く北風に吾の眉間は皴深からん
雨粒がぼつりぼつりとうつ水面夜半は雪か早く帰ろう
笹の葉を糸ひきながら打つ雨にみぞれがまじり音たてている
風紋のあらわに見ゆる砂浜に音を消しつつ初雪が舞う
河原に風音たかくひびく朝葦の根本にうすらいかがやく

シラス穫り

豊川 白井信昭

軽やかにエンジンの音響かせてシラス穫りをり音羽川に
音羽川に潮満ちきたりシラスとる明かり映れり今宵幾とこ
冬の日のあまねし電車の窓の辺に日向ぼつこと運ばれて行く
明け方のはるか沖合島々に赤黄緑の光点滅

『いじやよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

火の用心のカランカランの鐘聞こえ音遠ざかる寒の風の夜

石田 文子

この雪も賢治のすくひしひとわんの雪も同じくアイスクリームかも

山崎 俊子

雪山と大いなる青き琵琶湖ぬけ列車は走るよわれは若狭へ

牧原 規恵

日脚伸びしこの縁側にこの人と「記憶の小箱」いま開けむとす

三田 美奈子

真夜中に赤子の泣く声聞こえつつわれも眠れずそのまま明けつつ

稲吉 友江

やうやくに岩津天神様に納めたり幼の頃の息子らの達磨

鈴木 美耶子

新年に氏神様に詣でたり幼の小さき拍手打つ音

吉見 幸子

突然に院主の君の倒れたまふ訪へばはや「山主不幸」と

牧原 正枝

大寒の伊良湖街道を通りゆけばはや一面に菜の花の黄色

岩瀬 信子

雪起こしの花

豊川 堀川 勝子

病名が分かればそれで一区切り「家庭の医学」書棚に戻す
おもむろに医師の告げしはバセドウ氏受け入れ難くも婉^{したが}ひゆかん
サングラスの我が顔鏡に写し見る笑顔のなかに病を隠し
笑顔づくり今は病を隠しをり真の笑顔の来るを信じつ
雨上がりの冬日を返へす葉の陰に花茎低く雪起こしの花

私の一首

庭隅の庚申ばらを切り詰めて今年終りの花を残して

内藤 志げ

庭の隅の庚申ばら、六十年前私より先にこの家において大切にしたい一株。今も当時と株の大きさも余り変らない様に思う。

年の暮延び放題の株を間引きする様に根本から切り詰める、庚申ばらと名前の様に年に何回かの花が、師走の数少ない花の桃色に夕陽が映え一刻美しく輝いて見えた。

この一首何となくしっくりとしない、切り詰める事と、花の事とを二首にすべきか。

山里の雪は積りて雪景色足跡なき道何処まで続く

青木玉枝

伊丹を出てこの山里の明け暮れは、一生を通じかつて味わった事なき一ヶ年、四季の移りに山里の美しさそれに引きかえ生きる希望もなく、この足跡なき道を死出の旅に出来たらと思いい首浮びました。

わが居間を照らしながらに日は沈む弱き光を居間の奥まで

伊与田広子

私の家は南西に向いていますので、丁度冬至には居間の中心当りに日が沈みます。お天気がよければ暖房なしで過ごすことが出来ます。

自然の暖かさは気持ちよいもので、冬は居間に入り浸りとなってしまい、前の家の屋根に太陽は落ちて居間の奥まで弱き光を照らしながら落ちて行きます。自然は気持ち良いものです。時には居眠りしてしまい目覚めれば辺りは真暗になっていることもあります。

五年生の少女千尋に吾が聞かす所業無常のひびきあり……

小野可南子

二十五年新年号の私の一首です。

出来あがつてきたものを開いて気づいた次第です。

「所業無常」の業は行であつたことに気づいたということです。汗の吹き出す思いでした。校正を担当するものとして、失格ですね。

一首出来上ると、もう気がゆるむというか、二度、三度しっかりと確かめて原稿を出したいものです。自戒を込めてこの一首を選びました。

庭にある蜜柑色濃く実りたり大安なる今日取ると決めたり

清澤 範子

今年の蜜柑の木は、自然摘花にてMサイズの大きさの実が、多くさん着きました。十一月に入りもうとろうか、いつ取るうかと迷っておりました。暦をみて大安とある日を選んで取ることにしました。隣家にも分け、三人家族で食べるには充分な数となりました。来年も又多く実の着くよう、施肥をして年を越し、平穩を祈りました。

窓側に紅々咲きしシクラメン我八階の居間の灯

近藤 映子

毎年十一月末になると近くの花屋にシクラメンの鉢が並ぶ。その一鉢を求めるのが楽しみでした。しかし夫が緊急入院以来、この六、七年買い求める間なく過ぎた。シクラメンの鉢は下から水を吸上げる仕組の鉢で、下の小さな水口に水を注ぎ入れる。その空鉢がベランダの棚に幾つも残っている。久しぶりに昨年暮れに買い求めた。今も次々と咲き、夫の見舞から帰宅し、電灯を付けると真直に窓側のシクラメンが目に入る。紅々と咲く、正に灯の様に。

殊の外寒きところに行きたかり夫の遺品のふはふは防寒着

杉浦恵美子

この歌を現代語で表現すると「殊の外寒いところに行きたい夫の遺品のふわふわ防寒着」となっているかにも平凡です。そこで語調を整えるため助動詞「たし」の連用形を用いたら収まりがよくなったように思います。また旧仮名遣いで「ふはふは」としたら字面として「ふわふわ感」が増したような気がします。

短歌としての表記は、漢字・平仮名・片仮名だけでなく旧仮名遣いや時にはローマ字も使えて多彩で、それがまた面白いと思います。

贈呈誌

冬雷 三月号

浦山 きみ子

正月は子ら引き連れて来ると言ふ息子に夫の笑み深まりぬ

秋楡 二月号

三原 香代

柗 三月号

勝木 四郎

はつゆきは窓に憩しきみちいて舗道へとどかざるまま朝日に消ゆる

古語を忘れ字引ひくことの多くなれり老いのしるしと言はば言ふべく

愛媛アララギ 三月号

西村 栄子

群山 二月号

奥山 隆

母思よすがふ便の花とわれの待つささらぎ二日咲く梅の花

放射能に禁止の漁場さかのぼり鮭の幾つか堰を越えゆく

鹿児島アララギ 二月号

掘之口ふさえ

榎の木 二月号

上山 篤義

オリオンの三つ星高く昇りをりいねむと夜ごとわが見る空に

地下道を上るにペタル踏みきれず降りて押しゆく息荒きまま

高知アララギ 二月号

森 禮子

穂の原 二月号

鈴木 せつ

「ひつこち」と夫の教へてくれし鳥ひつひつと鳴く草抜く庭に

買物であれやこれやと見て廻り財布のぞきて買わずに帰る

『俳句』

腕時計外し手首の寒さかな

植村公女

鉄棒の雪もんどりと落ちにけり

隣席の嬰と視線合う春の旅

山目覚め光の海の中にあり

一石

心なし囀り高し春隣

春といふ生命力を深呼吸

牡蠣打の船に荒波日本海

喜仙

嘴太の羽根の漆黒淑気かな

散策の歩かづの仲ふる雨水かな

白梅に鼻先つけて花粉付く

皓一

子規の碑や球投げ合えり春の風

色も無く何事も無く木の芽風

子規の短歌革新とアララギの歌人（9）

佐藤 喜仙

（三）歌よみに与ふる書

明治二十五年十二月一日、陸羯南の「日本新聞社」に始めて出社する。月給は十五円であった。母八重、妹律との三人の家計を支える生活は困窮を極めた。子規は叔父大原恒徳に支援をいくたびかあおいでいる。幸い翌々年三月、明治二十七年三月、月給が三十円になり、楽な生活になったとは言えないが、困窮状態からは脱することができたようである。

明治三十一年「歌よみに与ふる書」に始まる短歌革新迄の間の、子規の俳句革新を明治二十六年から三十年にかけて、年ごとに簡単に見てゆく。

明治二十六年（一八九三）

一月新聞「日本」に俳句欄を新設。三月から五月にかけて「文界八つあたり」を同紙に掲載。七月十九日、奥の細道に触発され奥羽旅行に出発、八月二十日帰京。この旅行は子規の生涯で最も長いものとなる。この旅行を

ふまえ十一月から翌年一月まで「芭蕉雑談」を日本に連載。

明治二十七年（一八九四）

二月一日、下谷区上根岸町八十二番地（陸羯南の東隣）に転居（現在の子規庵）同十一日日本新聞社から「日本」の姉妹紙「小日本」が発刊され、子規は編集長に就任。同二十三日「小日本」に「竹乃里人」の名で初めて短歌一道を発表する。七月十五日「小日本」廃刊。八月一日、日清戦争始まる。この年洋画家で書家でもある中村不折を知りその影響もあって写真中心の俳論を示した。

明治二十八年（一八九五）

日清戦争従軍記者を志願し三月三日東京を出発、五月十五日帰国の船に乗るが、十七日船上で激しく咯血。二十三日上陸したちに神戸病院に入院。一時は危篤状態に陥るが六月に入り小康を得、七月二十三日退院し須磨保養院に移る。八月二十五日松山に帰省し、当時松山中学校教師であった夏目漱石の下宿先に同居し、連日句会を開いたので漱石も加わるようになる。十月十九日松山出發、奈良を経て三十日帰京。「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」はこの折詠んだ句。十一月から十二月まで、子規の俳論の集大成とも言ふべき「俳諧大要」を日本に連載する。

「歴代天皇御製歌」(十)

貫名海屋資料館

『推古天皇』 第三十三代 在位五九二年(三十九歳)―六二八年(七十五歳)

推古天皇、第二十九代欽明天皇の第三皇女。日本最初の女帝。

推古天皇の母は蘇我馬子の妹、堅塩媛きたしひめ。即位の翌年、聖德太子(兄の第三十一代用明天皇の第二皇子)を摂政に立てた(推古天皇は叔母にあたる)。

聖德太子は、冠位十二階、憲法十七条の制定、小野妹子を隋に派遣。遣唐使の派遣。三宝(仏・法・僧)を敬い。太子や馬子と共に法隆寺を建立。

内外にわたり画期的な事業をされ、天皇を中心とした安定した時代が続いた。

六一二年の春正月ノ酒宴のとき、蘇我馬子が寿を歌ったのを、推古天皇が和した歌。

眞蘇我よ 蘇我の子らは 馬ならば 日向の駒 太刀ならば 呉の眞刀 諾うべしかも
蘇我の子らを大君の 使はすらしき

(日本書紀卷二十二)

ある自然科学者の手記 (11) 大橋望彦

『論に負けても、理には勝て』(2)

その典型的な事例が最近持ち上がっている。これは社会問題であるので、敢えて学術論文を引用せずに、一般新聞の記事を示すが、一昨年来、朝日新聞等で時々目にしたのが、『妊婦の血液を採取して胎児の染色体異常（この場合はダウン症候群）を検査して調べること』がアメリカ等で開発され、実用化が始まっている。昨年ようやく日本産科婦人科学会がその点に関するガイドラインなるものを示した。要するに、そのような検査を行なうことで、もしも、胎児がダウン症候群である事が判ったならばどうしますか？と云うことである。このガイドラインで明らかなのは、当然この疑問に答えを出さざるを得ない検査をするのであるから、検査そのものを受けないを決める際に、予め十分なカウンセリングを受けなければならない。従って、このカウンセリングの出来る十

分な施設を持つ病院等でしか、この検査をしてはいけません。と云うのである。既にこのことは、先行して行なっているドイツではカウンセリングがこの検査には義務付けられており、ほとんどん検査が行なわれているのが実情である。

諸外国と、日本の実情を比べると、そこに大変深刻な問題が潜んでいる。外国諸国と比較して、日本では少子高齢化が極めて速いスピードで進行していることはよく知られている事実であるが、婚期年齢もきわめて遅くなっており、それに伴う出産年齢の高齢化が極めて速いスピードで進行している。と云うことは、薄々しか感じていないのが実情であろう。ここが問題なのである。現在知られているデータですら、35歳過ぎの初産での高齢出産では、極めて高い頻度でダウン症候群の出生率が示されている。これはダウン症候群のみならず、色々な染色体異常症が発見されている。統計的にもダウン症候群の発生率は日本が群を抜いているのである。

このダウン症候群の症例は、およそ40年以前から注目

していたのであるが、それは、染色体異常といつても、ヒトの染色体の一番小さな染色体（21番目）が普通では2本の相同染色体となつているのが、1本多い3本の染色体となつており（トリソミーと言う）、その余分にあることから生ずる胎児の変化として、各種奇形、或いは知能障害、それに早老性が知られている。そうすると、生まれてくる児も不幸だし、産んだ親も当然ながら大なり小なり悩みを背負い込むこととなる。そうすると中には、そのような児が生まれてくることは望まないから、中絶して下さいと言う人が必ず生じてくる。昔、優生法と言う法律があつた時代なら兎も角、そう簡単に生命を扱うことは出来ない世の中である。それではどうするのか？これがカウンセリングの仕事となる。ですから、カウンセリングと言つても、二段階あり、検査を受けるか否かの決断の際と、検査結果によつては、更なるカウンセリングが必要となつてくるのである。

ところで、このようなカウンセリングが出来る十分な施設を持つ施設は今の日本でどのくらい存在するのであ

ろうか？甚だ覚束ない話ではあるが、現存の施設では極めて少ない状態であることは間違いない。このような場合のカウンセラーが圧倒的に少ないのである。これは日本の医学会が背負う、今後の大問題になるであろう。日本の医学会が背負う大きな問題は、先の倫理委員会の問題や、カウンセラーの養成、と言つた隠れた問題が山積しているのであり、これからも注目していかねばならない。

と同時に、少子高齢化の社会状態から生まれてくる新しい問題点についても、これから益々現実味を持つて、考えていけなければならないことを痛感している。少子高齢化が進み、婚期高齢化が進めば、ダウン症候群のような疾病が増加し、それを嫌う親が多くなれば、少子化が増大する。まるで悪循環である。この歯止めになることを考えねばならない時期に既に来ている。どうしよう……。

年が明けて、晴ればれしい話題の提供が出来ず、大変恐縮に思つております。

絹の話 (29)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

エリ蚕（野蚕）という絹

エリ蚕はアジアの温帯〜熱帯（高地）に棲息する気温20℃〜30℃を好むヤママユガ科の絹糸昆虫で、神樹やヒマ、キャッサバ（タピオカ）等の葉を食べ、カシミヤの様な柔らかい糸を吐きます。主な産地はインド東北部、ベトナム北部、中国雲南地方（昨今飼育しなくなった）、最近タイ北部、フィリピン、ラオス、エチオピア等でも飼育が試みられています。かつて日本でも太平洋戦争末期北支派遣軍の冬服（保温性、防弾性、抗菌性に優れている）を作る為、ヒマの木を植え、ヒマシ油を採りながらその葉でエリ蚕を、西日本一帯でヒマ蚕と称して大量に飼育した経緯があります。

家蚕も殆どの野蚕も糸を吐きだしたら（500m〜1500m）途中で切る事無く繭を作るのですが、エリ蚕は途中で糸を切つて繭を作りますので、絹の最も優れた特徴の長繊維が採れません。始めから屑繭扱いで、手

糸糸、絹紡糸等に加工され、繭価格も安値安定していました。

ところが最近健康志向ブームで大手企業が綿と相性が良いと云うのでエリ蚕の機能性を利用した綿混のインナーなどの生産を始めたのですが、たちまち原料不足に陥っています。そこでエリ蚕絹の混入率を25%にする様ですが、これでは綿の力に圧されて目的とする絹の機能性が十分発揮されません。羊頭狗肉の商品とならなければ良いがと思います。

エリ蚕はブータンの女性の衣装（キラ）を作る様な地産地消の素材なので大量の在庫は無く、直ちに大量生産は出来ません。絹の生産は年収8000usドルを超える地域では成り立たないのが現状です。

△ 国際野蚕学会 V

昨年（2012）11月中旬タイ東北部のコンケーンのマハーサラカム大学で開催された国際野蚕学会に出席しました。目的は野蚕シルク生産国の状況を把握する事と、タイシルクを作るカンボージュと云う黄色い繭の生産状況及び3年前から本格的に取り組み出したエリ蚕飼育の

現状（繭の品質、生産量）を見学する事でした。

学会の製品展示会場にエリ蚕の繭と手紡ぎ糸を出品していた農家がありましたので、大学から車で1時間半ほど北のポンペーク地区のその農家を訪ねました。

△エリ蚕飼育▽

この農家は企業農家でち坪ほどの鉄筋コンクリートの展示場があり、中には黄繭、エリ蚕の糸やシヨール、ブラウス等販売しており、一部に縫製スペースもあり、隣接して草木染めの染色場も有りました。道の反対側には屋根から壁の代わりに黒い幕を垂らした（通風利用の温度管理）エリ蚕飼育場がありました。

エリ蚕は適温と餌があれば休眠しないので、16日に1回のサイクルで飼育していました。少々単価が安くても多数生産で収益を上げていました。低温にならず、高温になり過ぎないタイ北部は適地のようです。

エリ蚕は熟蚕（糸を吐く直前）になると白い体が黄色のやや透き通った感じになります。竹と木の蔓で編んだ「まぶし」に移して行きます。「まぶし」とは蚕が繭を作るのに丁度よい空間を作った平たい編み物）このまぶ

しはベトナムの様に藁で出来ていないので、藁や初屑が繭に付着しなく品質向上に大変貢献してました。

まぶしに入って2日もするとほんの少し米寿がかった白い繭が出来ます。これが生繭です。生繭から蛹が出てくる時、繭の中を生理現象で汚すことが有るので、その前に切り繭（繭をカッターナイフで切り、蛹を取り出したもの）にしてロスを減らしていました。

何故タイは国を挙げてエリ蚕に取り組むのでしょうか！エリ蚕は野蚕ではあるがほぼ家畜化されて、家蚕より飼育し易く、汚たり、ゴミの付着が無ければ繭の等級的斟酌があまり問題にされないのです、小規模で農作業の間に飼育出来、飼料のキャッサバ（タピオカ）は葉が餌になり地下に出来る芋は市場や澱粉工場に売れ、更に蛹が市場で良い値で売れるので（昆虫食が盛ん）、日々現金収入になります。また大量に出る糞は畑の良い肥料にもなっていました。

タイ北部の貧困対策として効果が上がって来ている様ですが、日本の企業が希望するように、毎月トン単位で輸入出来るほどにはなっていません。

物理学者と詩歌の世界 (39)

一石

ルイス・W・アルヴァレス&W・アルヴァレス

ルイス・ウォルター・アルヴァレス (Luis Walter Alvarez, 1911-1988) は米国の物理学者、サンフランシスコに生まれた。シカゴ大学卒業、1936年同大学で博士号を取得。宇宙線における「東西効果」の発見、原子核によるK-電子捕獲の現象の発見 (1937)、中性子-水素散乱の研究、中性子の磁気モーメントの測定、トリチウムの放射能の発見、レーダーシステムの開発など実験物理学の分野で多くの業績をあげた。1968年、水素泡箱の利用による共鳴状態の発見など素粒子物理学への貢献によりノーベル物理学賞を受賞 (参考資料1)。

1943-1944年には原爆開発のマンハッタン計画に参加。専門分野以外では、後述する「隕石衝突による恐竜の絶滅説」が有名である。

その他宇宙線を利用したピラミッドの透視 (注1) や、J・F・ケネディ暗殺事件についての見解など、広い範囲の分野に好奇心を示した。アインシュタイン・メダルなどを受賞。

エピソード…1945年8月9日、長崎市への原爆投下

の際、ルイス・アルヴァレスは上空で観測用に投下したラジオゾンデに、カリフォルニア大学の放射線研究所において同僚であった当時の東京帝国大学教授嵯峨根遠吉に宛て、「核兵器の威力についてよく知るあなたから、日本政府に降伏の働きかけをしてほしい」旨の手紙を同封した。

ウォルター・アルヴァレス (Walter Alvarez, 1940-) は米国の地質学者。カリフォルニア州バークレーに生まれた。祖父のウォルター・C・アルヴァレスは高名な医師であり、曾祖父のルイス・F・アルヴァレスは、ハワイにおいてハンセン病の診断法の普及に尽力した人物。また、大叔母のメーベル・アルヴァレスもカリフォルニア州では著名な画家として知られていた。1962年にミネソタ州カールトン・カレッジで地質学の学位を、1967年にはプリンストン大学で博士号を修得した。現在はカリフォルニア大学バークレー校にて、地球および惑星科学の教授を務めている (参考資料2)。

石油地質技師として働いているうちに、地質考古学に興味を持ち、職を辞し、イタリアで古代ローマ期における火山活動が人口分布に与えた影響について研究を行った。1971年にコロンビア大学のラモント・ドハティ地球研究所に移ってからは、当時新しい理論であったプ

レートテクトニクスの知見に基づいて地中海におけるテクトニクスの研究を始めた。彼は、イタリアの古地磁気研究から始め、深海底で形成された石灰岩に保存された古地磁気反転の記録の研究に至った。その研究成果によって過去1億年間の地磁気年代の同定が可能になった。

ウォルターの最も広く知られた業績は、父親ルイス・アルヴァレスとの共同研究で白亜紀と第三紀の境界（K/T境界、注2）に位置する粘土層から極めて高い濃度のイリジウムという物質を検出したことである。イリジウムは非常に重く、地球誕生当時、地球中心に沈んでしまったため、地表においては極めて少ない。小惑星には普遍に含まれるものである。濃集したイリジウムは、大きめの小惑星が地球に衝突したことによってもたらされ、かつ、それが白亜紀-第三紀における恐竜の大量絶滅の原因となったのではないかとする説を1980年に発表した。このイリジウムの濃集層は、その後広汎に地球的規模で発見された。メキシコのユカタン半島にチクシュループ・クレーター（注3）が発見されたが、これは今では衝突事件があった証拠と見なされている。実際、K/T地層を境に恐竜を始めとして化石の種類が激変している。その結果、約6500万年前に起こった恐竜などの大量絶滅（注4）の主な原因として、衝突説は認められるようになった。

またウォルターは、地中海のテクトニクス、ローマに

おける地質学及び考古学および磁気層位学的な相関性の確立に寄与している。

注1…宇宙線のミュー粒子はどんなものでも透過する。アルヴァレスは測定器をピラミッドの周りに様々な角度に並べてミュー粒子を測定。隠された空洞の部屋があるかどうかを調べた。

注2…K/T境界とは白亜紀（Cretaceous）と第三紀（Tertiary）の境界という意味。

注3…直径約160kmのクレーターが地磁気異常、重力異常などの分布によって確認された。衝突した小惑星の大きさは直径10-15km、衝突速度は約20km/s、衝突エネルギーは広島型原子爆弾の約10億倍、地震の規模はマグニチュード11以上、高さ約300mの津波の発生が推定されている。

注4…全生物種のうち60%、海洋生物では75%が姿を消している。

参考資料

1) フリー百科事典『ウィキペディア、ルイス・ワールヴァレス』、[Wikipedia](https://ja.wikipedia.org/wiki/Luis_Walter_Alvarez)、[The Freencyclopedia](https://ja.wikipedia.org/wiki/Luis_Walter_Alvarez)、[Luis Walter Alvarez](https://ja.wikipedia.org/wiki/Luis_Walter_Alvarez)

2) フリー百科事典『ウィキペディア、ウォルター・アルヴァレス』、[Wikipedia](https://ja.wikipedia.org/wiki/Walter_Alvarez)、[The Freencyclopedia](https://ja.wikipedia.org/wiki/Walter_Alvarez)、[Walter Alvarez](https://ja.wikipedia.org/wiki/Walter_Alvarez)

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

九 佐藤佐太郎 1

茂吉の高弟佐藤佐太郎の歌は、茂吉の日記、佐太郎著『茂吉随聞』等を参考にしてその背景をも明らかにしてゆきたい。

街にいづる君にしたがへばかくま囿はれしものの如くに心

なぎゆく

『軽風』昭和七年

銀座通よこぎり来りやうやくに四時間前に見し事件

を思ふ

デパートに君は胃散を買ひて出づ午後の日ざしとなりし巷に

小題は「一月」であり一首目の下に「八日」と注がある。茂吉はこの日の日記に、「佐藤佐太郎君来ル。……佐藤君ハ今上陛下ノ観兵式御カヘリニ桜田門外ニテ爆弾ヲナゲシモノアリ、ソレヲ見タリ。……鳩居堂、松坂屋」とある。右の二首目の「事件」は爆弾事件である。佐太郎は『茂吉随聞』にこの一首のことを、「目撃した事件を話すと、『いまの天皇は皇太子のときもいちど経験し

ているから平気なものだ、おどろかないよ」と言われた。……銀座に出て、松坂屋で茶を喫し、先生は胃散を買われた」と記録している。

やうやくに老いたまふ君みちのくに深々とつみし雪
を見たまふ
『歩道』昭和九年

この歌について佐太郎は、『互評自註歩道』の中で「當時上ノ山温泉に滞在してゐられた先生から端書の通信をいただき感傷して、この一首を成した」と説明している。

いとけなかりし師をし偲べば大き家の二階もともに
障子とざしぬ
『歩道』昭和十年
まちかくの杉の老木に蟬なくや師がをさなくて遊びける庭

小題は「金瓶」。「いとけなかりし師」「師がをさなくて」二首ともに茂吉の子どもの頃を偲んでいる。佐太郎の年譜には「夏、山口茂吉氏とともに蔵王山に斎藤茂吉歌碑を見た。ついでに金瓶に斎藤茂吉生家及び宝泉寺を訪ねた」とある。佐太郎夫人の佐藤志満には、「み墓べに柿のみみち葉赤くして宝泉寺境内すでに夕ぐれ」（『渚花』昭和三十八年）がある。

山荘の疊に月の照ることも君がへにして心しづけし

『歩道』昭和十一年

箱根の強羅にある茂吉の山荘を訪ねたときの歌である。本章の一首目に挙げた歌に「囲はれしものの如くに心なきゆく」に似たような心の安らぎを詠んでいる。茂吉は日記に、「七時ノ電車ニテ山口君下山ス。予ハ佐藤君ト名月ヲ賞ス」と書いている。佐太郎は先の互評自註の『歩道』に「箱根の月は、山上であるからしみ透るやうに清い。この光を浴びるやうにして疊に坐つて先生と話したことに私の感動があつたやうに思ふ」と記録している。

みいのちのゆたけき君は老いたまふ一日一日をおろそかにせず
『しろたへ』昭和十七年

国こぞる滾ちのなかに勝鬨のひびかふなかに君居りたまふ

ひとつづつ作らず歌にうつしみの全けき力果したまへり

かなしみの沁みとほるまで天地にわたらふまこと歌ひたまへり

きはまりにいたらむ歌の境をし仰がむとして君をこそ祝へ

小題は「斎藤茂吉先生還暦賀頌」である。二首目は前年から始まった太平洋戦争の興奮の中にあつて殊に高ぶっているであろう茂吉を詠んでいる。三首目の「歌にうつしみの全けき力果し」は、これまでの全歌業について言つたものだろうが、この戦争が始まつて一層力を入れている趣をも意味しているだろう。

茂吉の誕生日である五月十四日については茂吉の日記にも『茂吉随聞』にも特別の記録はない。『茂吉随聞』の五月十二日の項には「先生は四月三十日上ノ山へ行き、還暦記念に笹谷越えをして五月八日帰京」とある。

家なかば寒しとおもひ雪どけのしづくきこゆる君のへに居し
『立房』昭和二十一年

小題「最上川畔」に「三月末、山形県大石田町に行きて病床の斎藤茂吉先生に見ゆ」と詞書がある。このとき、前年に岩波書店を退社していた佐太郎のちに白玉書房を興す鎌田敬止に誘われて青磁社に入社、茂吉の『文学直路』の編集に携わっていた。茂吉は疎開先の金瓶からのちに自ら「聴禽書屋」と名づける大石田の二藤部兵衛門の離れに移り住んでいたのである。『茂吉随聞』に「一方には雪よけの板が組んである。雪どけのしづくの音がしきりにしていた」とあるのが右の歌の背景である。

楽しい時間 5

山本紀久雄

2013年2月28日

2月の「辻照子先生の料理とマナー」教室は遅刻した。遅刻理由は午前中に川口市の住宅展示場に行ったため。というのも、現在、自宅を建て替え中で、家の外壁塗装をシラスL仕上げという山型のライン、これは手作りの温もりが伝わるパターンなので採り入れたのだが、塗装終了後の外壁は、いかにも雑で、展示場で見たサンプルとは異なりすぎる。そこで、確認のために川口まで出かけたわけ、結果として塗装のし直しとなった。

蔵の「いーとびあ」に着いたのは15分遅れ。既に辻先生の実習が始まっている。後ろの方に椅子をおき、いつても、いつも最後尾に位置しているので同じ場所であるが、先生の料理づくりを拝見していると、いつもと違う違和感がつづく、しっくりこない。

やはり、最初から見ていないと、今はどの料理で、どこらあたりの手順になっているかが理解できないのである。ということ、ポオーとしたまま、チーム1の調理場に立った。

そうすると、みどり監督が無言でオリーブ油を差出して来る。先月はジャガイモを渡された。あの時は皮を剥けというシグナル。今回は何か。オリーブの入った容器を持ってほんやりしていると、今度は鍋を渡される。そうか。鍋にオリーブを入れて何かを炒めろという指示かと向こうのザルを見ると、玉ねぎ、人参、セロリが切られておいてある。

ここでようやくポオーが直ったので、早速に炒めはじ

める。炒めた後は、ブイヨン、水、塩、こしょう、ローリエを加え、沸騰したらアクをとり、ふたをして弱火で約10分、その次に輪切りにしたソーセージを加えて2〜3分煮て、パセリを散らし、粒マスタードを添えると「野菜とソーセージのマスタード添え」の出来上がりである。二品目は「ポテトのステーキアンチョビ風味」と、三品目は「鶏肉のバルサミコ酢煮」、これは他の優秀メンバーによって手早く調理され、隣の教室のテーブル上に運ばれる。

さて、テーブルにおかれたつくり立て三品を早速食べることになるが、その前に今日のワインの説明がある。今回は白赤ともにスペイン産。スペインに何回か行っているが、残念ながらワイナリーへの訪問はしていないので、何ら解説は出来なく、ただグラスを傾けるだけ。

ワイワイガヤガヤ、食べながらお互い楽しい話題に興じていると、辻先生がもの柔らかに淑やかに立ち上がり「皆さん、今日はグラスの勉強をしましょう」と声をかける。

既に、白板にはシャンパングラスのフルート型とフラット型、ワイングラスのチューリップ型、ブランドーグラスの形が描かれている。

これに基づいて説明が始まり、次いで立食パーティー時での料理皿とグラスの持ち方についても触れられたが、メモをとらなかつたので確実なことは言えない。辻先生には申し訳ないが、ネットに書かれたものでお伝えしたい。「立食パーティーでは、できるかぎり利き手を空けておくと、なにかと便利です。初対面の人と会えば握手をしますし、会話の最中に簡単な身ぶりやしやすくなります。しかし、問題なのは、皿とグラスを同時に持つ方法です。皿とグラスを片手に持つには、次の持ち方を心が

けましよう。人さし指と中指の間に、皿を挟みます。次に、親指と人さし指を使って、グラスを固定します。このとき、紙ナプキンを皿とグラスの間に挟んでおくと食器を傷つけませんし、カチャカチャという音もしなくなります」とある。

この時、突然、先日お会いした呉善花（オ・ソンファ）拓殖大学国際学部教授からお聞きした内容を思い出した。呉善花教授は、元韓国籍で日本に帰化、日本では知日派でとり、韓国では親日派、「売国奴」として扱われていて、韓国へは入国禁止措置を受けたこともあり、韓国漢字復活論支持者でもあるが、その呉善花教授発言は以下の通りであった。

①朴槿恵大統領は親日ではない。父が日本との親密な関係があつた朴正熙元大統領の娘なので親日派と、日本でいわれているようだが、全くの誤解。

②朴正熙元大統領は元日本陸軍中尉で日本名は高木正雄、現在の韓国軍隊を日本式でつくつた人物。

③だが、反日教育はこの朴正熙元大統領から始まった。

④反日教育の中味は、日本人⇨野蛮人⇨未開人

⑤新大統領の補佐役でナンバー2の女性は、日本に二年間留学し、韓国で本を書いた。タイトルは「日本は無い」。300万部という大ベストセラーになった。

⑥この本の内容は、日本と韓国の違いを述べ、日本人の野蛮性を追求している。

⑦例えば、靴の脱ぎ方。日本人は靴を脱いで、出口の方に揃える。したがって揃えるときに体を曲げる。これをねじると表現し、だから日本人の「心はねじれている」と証言する。韓国では出口に向かって揃えるのは「早く帰れ」という意味になる。

⑧食事で日本人は左手でお碗を持って食べる。韓国では左手が使わない。右手のみ。また、お碗を直接口に持っていく。これは犬食いであり野蛮人。

呉善花教授は、まだまだ多くのことについて指摘されたが、この⑧の日本人は「犬食い」で野蛮人」というところは、韓国へ行つた際に韓国人から直接指摘されたことがあるので、韓国人が日本人を侮蔑する場合の常識となつているのだろう。

だが、ここで不思議に思うのは、韓国人も世界の多くの国々で立食パーティーには参加するだろう。その際に、左手に皿とグラスを

持たないであろうかという疑問が発生する。右手のみで立食パーティーの飲食は難しいのでないか。一度、機会があれば率直に韓国人に聞いてみようと思つている。

話は戻るが、辻先生のワイングラスについての解説、とてもよくわかるが、問題は聞く側である。ワインが入つたため、テーブルの前の席の人は聞いているが、後ろの方のメンバーは全く耳を傾けず、盛んに楽しい話題に興じている。

突然、辻先生が「ここは飲み会ではありません」のカット。一瞬、静かになり、全員が辻先生の顔を見つめると「ニコツと」素敵な顔になる。さすが35年のキャリアは伊達でない。



(釜山名物デジクッパ)

長塚節の病・恋・旅(2) 夏目勝弘

漱石の久保博士への紹介状を携えて博多に四月二十二日向う、静岡、名古屋を経て月ヶ瀬にて梅を見せして伊賀上野、この道順は中村憲吉と芭蕉への思いがあつたのであろう。

京都医大で二十六日入院し手術を受け二十七日退院京都市内を見学「名作を頭の痛くなるほど見ることが出来た、死んでも悔いはない」とそして嵐山祇園など(花を毎日を見てある)。

四月十二日吉野に二泊、京都に戻り再度治療を受け、二十日京都を發つ、後楽園、広島、錦帯橋を見学し二十二日博多着。福岡で九州大学の久保博士の診察を受ける、病状良好との診断のため二十五日福岡を發ち熊本に向う。

死病を持つ節の今後の行動を記すのみで節の思いが感じられる。

熊本では水前寺公園に立寄り、人吉を経て鹿児島へ。

二十八日開聞岳に登り安楽として宇土を経て海路長崎へ、住の江、佐賀、太宰府を巡り五月七日福岡へ帰着。久保博士の診療をうけその間も十日武蔵温泉に宿り水城、太宰府を訪う。十五日春陽堂より「土」出版。

六月十一日芥屋十三日武蔵温泉へ二十三日博多より対馬の厳原へ渡り竹敷まで行く。

二十六日志岐の勝本へ渡り湯本温泉に泊り三十日博多に帰る。

七月一日太宰府天満宮、観世音寺を四日博多を發ち耶馬溪、英彦山、羅漢寺、中津の自性寺で書画を見る。十四日宇佐神宮十九日別府より海路伊予高浜へ道後に宿る。

四国への目的は子規旧宅に行くことであろう。石手寺、大山寺、宝厳寺を見学。二十五日厳島神社二十七日尾道より大三島に渡り大山祇神社の国宝の甲冑を見る。二十九日尾道へ戻り、千光寺浄土寺へ詣る。

八月一日栗林公園屋島壇の浦五日琴平七日国分寺、高松から大阪へ行く途中播州書写山へ登り鶴林寺十日加古川泊十一日紀三井寺、和歌山泊。十二日粉河寺十三日高野山。

十七日法隆寺、法輪寺、十八日興福寺、博物館を見奈良泊。十九日東大寺、博物館二十日浄瑠璃寺二十一日当麻寺、法隆寺、畝傍泊。

二十二日久米寺、岡寺、橘寺二十三日唐招提寺、薬師寺、博物館二十四日京都へ。

穴太寺、三宝院、法界寺、宇治鳳凰堂、博物館。九月一日京都を發つ、三井寺、善水寺、金剛輪寺に参詣し、

大垣、名古屋を経て、十四日東京で博物館を見学。二十五日下妻に一泊、二十六日帰宅。十一月六日上京、博物館、文展、展覧会を見学し養生院で診療十二日漱石を訪問

十二月に入り帰宅をする。

大正二年二月病氣再発のため上京神尾学士の治療を受ける。

三月十四日西下。大阪の天王寺、住吉神社、岡山の西大寺、長岡観音広島の牛田不動院、長府の住吉神社を参詣し十九日博多着。

久保博士は「結核の疑さへなし、喀痰の検査にも病菌を發見せず」と診断。このため山陰旅行に發つ。

この旅の途中父大患の知らせ月末に帰宅、父は快方に向。七月三十日伊藤左千夫急逝。八月二日葬儀に参列。

十一月二六日喉頭結核再発入院手術。

「氷魚」のことから (147) 岡本八千代

九つの人九つの場をしめてベースボールの始まらんとす

子規の歌が読売新聞(2月17日)に横書きで載っていた。その下にプロ野球選手たちのキャンプ姿が大写到載っていた。さぞかし正岡子規、今在あればどんなにか興奮していることだろう。

そんな想いをもって彼の小説「月見草」(二)をまとめてみた。

二。

● 毎晩同じ時刻になると正美は宿の欄干にもたれて闇の木の間より海を見ることになってしまい、それもやめてしまった。

● かの女神……

● かの女神の面影も次第に薄らぎ、ランプの陰にその幻影を見ることもなくなった。

● 或る日、写真売りの少女が正美の処へやってきて、「写真は宜しゅうございますか」といつてきた。

● 「どんな写真か？」と見せてもらい、いずれも須磨の景色であったので四・五枚買った。もう一枚、「須磨館の写真があったのでそれも買った。少女は「ありがとうございます」と挨拶して帰った。

● 正美はうとうと昼寝している時、貸本屋が来た。二・三

冊の伝記物の本を買って読んだ。――

「百折撓まず水火の中に飛び込んでも一大事業をなし遂げんと思ひしものを、あたら二豎(病氣)のために困められ、人生の定め其半を過ぎざるにはや氣息奄々(意気もたえだえに衰え)として力將に尽きんとする哀れさよ」(原文より)と自分を嘆く。

● また、敦盛の無残の死を遂げたことも思い出し、自分は何もかも劣ることに「己んぬるかな」と嘆くのであった。

● 正美と高畑権二郎の若い時のこと。

● 高畑は、関西の生れ、年令、小学校、大学も同じで、同年に法科を卒業した友達。

● 二人は、城下の雙俊と呼ばれていた。

● 二人は、少年の頃の夢として、「一番で卒業して、天下の一人になる」と競争したほどであった。

● 二人の性行は、相反していた。

● 正美は猥介にして人と合わない代わりに正直であった。

● 権二郎は交際の術に長じ一見人をそらさない風、しかし表裏があった。

● 容貌は、正美は色白で痩せていた。権二郎は色濃く肥えていた。

● 卒業にも正美は第一位を占めていて、學術優等で、洋行を命ぜられたほど。しかし彼は病を冒されて、須磨に遊ぶ身の上、「ついに自ら恢復の見込みなしと思えるほどなれば。」おわり。

● 哀れな子規の「月見草」の短篇であった。

ことのはスケッチ (412) 今泉 由利

『戸籍』

そつと抜け出し、そつと手続きを終え、そつと暮らしているつもりだった。

四十年來持ち続けた「離婚届」を、そつと区役所に提出しに行った。

私が、日本国に住むに必要なことの書類の名字が変わり、書き変えられたことを知らせる通知が、「あ！そう」と思うほど郵送されて来た。

今までのパスポートが使えなくなった。唯一、私の身分を証明出来るものだったから、これ無くしては生きているとも、死んでしまったとも…とにかくこの世から相手にされなくなつたことを知る。

私の会社も、代表取締役の私の名字が変わって、一切の機能を失つた。

「外国へ行くな！」という父に、「ちよつと行つてくるけれど必ず帰ってくるから」と約束した父母のもとへ。

「区役所で、「新しい戸籍は！」と聞かれ、咄嗟に「生まれた所」と言っていた。

年末年始ということで、時間がかかつてしまった新しい戸籍謄本は、郵送で頼んだ。

前にも横にも後にも何もなし、たった一人の私の名前だけ書いてある紙ペラが送られてきた。

天涯孤独ということを自分にしてしまったことになる。

かわいそうな戸籍「全部事項証明」をもって、パスポートの申請をした。十年パスポートをとったばかりだったのに、また同じ手続をして、同じ時間をかけ、同じ費用もかかり…。それでも本当の名前のパスポートが出来てうれしかった。

そして、今度は会社を復活させなくては。

「どう考えても、どうして良いのかわからない」。専門家に頼んだ。

「急には出来ない」と、なかなか対応してもらえず、お化けになってしまったみたいない日が続いた。

代表者の名前の変更、印鑑登録の為直し。それから何をしなければいけないのか…。予定外の請求書が届き、終了したらしい。

こんなのってセクシャルハラスメントだと思う。「婚姻届」とかで名字を変えさせ、もとに戻しただけに…散々負担をかける。「女性」をないがしろにしすぎる。

自分の本当の名前ではない。パスポートに苛立っていた一生だったけれど、アルゼンチンで永住権を取った時の私の正式の名前は、「ユリコ・イマイズミ・デ・タカヤマ」だったから平穩に過ごしていた。

セリーナさんの名前は、セリーナ・アラウス・ペラルタラモス・デ・ピロバーノ、父系、母系の名字、そして婚姻名字、こんなのつてとてもいいと思う。

はやく自分の本当の名前にしてあげなくては…とずっとずっと焦っていて、今やっと、生きているうちに本当の自分に戻れた。

和菓子街道 (78)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

前回で東海道の歩き旅は終わってしまったわけだけれど、考えてみると、大先輩の弥次さん喜多さんは旅の後半、私とは別ルートで京に行っているのだった。かのふたりは、四日市の日永の追分で東海道から外れて、伊勢経由で京に向かったのだ。

弥次さん喜多さんに限らず、神宮参詣を目的としたお伊勢参りの旅は江戸時代で大流行し、働き先の店や家を抜け出してまで伊勢詣でをした奉公人や子供も少なくなかった。

そこで、『和菓子街道』でも弥次さん喜多さんの足跡を追いかけて、東海道を歩いた時に見送った伊勢街道に足を踏み入れることにしたいと思う。くしくも今年は、伊勢の神宮で二十年に一度の式年遷宮が行なわれる。遷宮の翌年は特に神様の御神威が増す「おかげ年」といわれ、



江戸時代の旅人もこぞって伊勢に参ったという。江戸の旅人のマネではないけれど、遷宮年からおかげ年にかけての伊勢詣で歩き旅に、いざ出発!

日永の追分に立つ「右京大坂道 左いせ参宮道」の道標。

◆交通

旅の起点「日永の追分」へは、近鉄内部線追分駅よりすぐ。

お知らせ

▽歌会(907)を、開催します。

※四月十八日(木)十一時。

※御津町広石御津山「吞籠」に於て。

※会費 三千元。

※詠草二首を、四月十日(水)までに
必着、郵送のこと。

▽五月号の原稿は、四月一日(月)まで
に、必着、郵送のこと。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を
使用し、文字はわかりやすく楷書
で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

▽「六十周年記念歌会」を

四月十八日(木)午前十一時より、御津町
広石御津山「吞籠」に於て行ないます。

会費は、三千元(昼食代)、詠草二首を、ハ
ガキにて四月十日必着、「三河アララギ」
編集部まで郵送して下さい。詠草ハガキ
が届き次第出席と致します。

大勢の会員の出席をお待ちします。

▽今月号より 歌集「スモン」より感銘歌
を掲載致します。

故大須賀寿恵先生は、「三河アララギ」
の大先輩であり、治療法も確立されてい
ない、スモンという病とたたかいたながら短
歌に、また学校教育に、大きな業績を残
されました。(山口)

▽春「アジアの絹の魅力」

三月二十八日(木)～四月二日(火)

豊橋 ほの国百貨店六階「季節の催し場」

お話「絹と健康」

今泉雅勝 十三時三十分～十四時三十分

十階特設会場

三月三十日(土)『タイ国際野蚕学会参加
体験と昆虫食』

三月三十一日(日)『絹と生活の今後』

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河ア
ララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることが
できる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、
一カ年分三万円の割で前納された。ただし、購読会員
は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられた
い。退会の際も同様だちに連絡せられたい。なお、退
会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席すること
ができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿すること
ができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返
却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があれば
お返しします。

平成二十五年三月二十五日印刷 第六十巻 第四号
平成二十五年四月一日発行 定価 六百元

編集所 岡本 八千代・小野 可南子・夏目勝弘
平松 裕子・山口千恵子
今泉由利

発行所 三河アララギ会
三河アララギ発行所 千四四一〇三二一
豊川市 御津町 御馬 西三三七
TEL (〇五三三)七五二〇〇九
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九
Email yuri88@cronos.ocn.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所 株式会社 桜 創美

URR

URR

URR

URR

URR

URR

URR